

「誠（正）心誠意」 ～あなたの心は正しいか？～

I サムエル 12:20～24 ピリピ 4:4～9

みなさんは「あたりまえ」と思っていることはありますか？この「あたりまえ」は非常に怖い考え方です。誰が「あたりまえ」だと決めたのでしょうか。私たちが「あたりまえ」だと思っていることが他人にとっては「あたりまえ」ではないことがたくさんあります。相手が分かってくれていると思っても分かっていないこともあります。「あたりまえ」を言い換えると「正しさ」と言うことになります。私たちが「あたりまえ（＝正しさ）」を間違っただけで認識していると、正しいと思っていることが何を基準にして正しいと思っているのか、これが間違っただけで認識されます。私たちはこれが間違っているから憎しみあつたり赦せなくなったり、世界では戦争が起きたり子どもたち（弱い立場のひと）がひどい目にあっています。

「誠（正）心誠意」という言葉があります。野田首相は演説でこの「誠（正）心誠意」を説きましたが新聞では「この誠（正）心誠意は届かない」と酷評されました。なぜでしょう？誰を入閣させるとか自分たちの事ばかり考えて政治を行っているからです。元々この「誠（正）心誠意」と言う言葉を使っていたのは明治維新の立役者・勝海舟です。この人は正しいと思う心をもって日本を変えていきました。その日本を変える人はどうあるべきなのか…幕末の騙し合いの時代であつてどのように日本を変えていくのかを考えてときこの「誠（正）心誠意」の心をもって変革に臨んだのです。私たちの心は正しいでしょうか？これから私たちが私たちに与えられた人生を歩む中で私たちがもっているその心の正しさをいかに考えるか…その土台がどこにあるのかを考えていく必要があります。（I サムエル12:20～24）この箇所は民が神よりも王に仕えろと言ってしまったときに「誠意をもって仕えなさい」と言った箇所です。「リーダーがもつべき資質とは何なのか？」と言ったときに私たちがどうあるべきか、自分を欺いてはならないという教えがあります。私たちは自分を欺くことはいないですか？リーダーはなぜ自分を欺いてはいけないのでしょうか？それは人の前に出ているときに正しいことを伝える訳です。そういうリーダーの資質は1人の時にどうあるべきかと言うことです。「1人の時に自分を欺いてはいけないよ」と言われています。そうでないと人はついて行きません。聖書ではこの教えをリーダーだけではなく私たち国民ももちなさいと言っています。私たち1人1人が誠意をもって従いなさい歩みなさいと言われています。「その誠意がどこにあるのか」そして「その誠意を基準にした正しさをもつ」と言うことを教えられているのです。私たちは人生を送る中で探していることがあります。何が自分の生きる道なのか・何が正しいことなのか・なぜ私たちが存在しているのか・どこに行つて何をするのか、それを私たちはいつも生まれたときから死ぬまで考えています。その正しさ・自分が何のために存在するのか、これらを見つけることができるとどうでもよいことに腹を立てることが無くなります。つまらないことにイライラして隣人を赦すことができず、自分が失敗してもごめんないと言えない人生とおさらばできるのです。なぜかという自分の中で何が正しくて何が嘘か分かっていて自分を偽らなければ、こんなことをする必要がなくなるからです。相手を怒るのは自分を偽っているからです。自分の本当の悪さを知っているのだけれどその悪さを何とか転嫁したいから人のせいにしてしまうのです。いつも自分の中に問題があると言うことは知っています。しかしごまかして人の責任にして生きているのです。しかしごまかすのを止めた人たちがいます。それは幕末の立役者・勝海舟であり日本を変える動きをした新島襄・ウィリアム・スミス・クラーク博士・新渡戸稲造・内村鑑三・福沢諭吉たちです。彼らの心の中心にあつたのは「自分を欺かない」ことです。なぜ、それを学ぶことができたのかと言うと自分を欺かない人を見たからです。自分を欺かない人というのはどういう人でしょうか？それは嘘をつかない人です。彼らは嘘をつかない人を見てきたのです。人は嘘をつきます。しかし嘘をつかない人を信じる人たちが、嘘をついてはならないと言うことを考える人たちがどう生きるべきなのか、その生きざまを見てきたのです。だから彼らは日本を変えようという思いに至つたのです。今回の礼拝は敬者の日・感謝礼拝です。この会堂に集つた敬者にあたる方々が今までに苦しい時代を生きて、そんな中であつても自分を欺かず、してはならないことをせず、自分にむち打つて生きてこられた背景があるのです。明治維新を起こした人は数人です。しかし日本・国が変わりました。私たちがその正しい心をもつことができればこの維新を起こした人々の意志を継ぐことができます。敬者にあたる方々が私たちのために今までに多くの種を蒔いてこられました。私たちが今不自由なく暮らせるのはこのような背景があるからです。そしてこの方々は自分が何をし・こうしたと言いません。それは自分の弱さや問題を知っているからです。私たちが正しく歩まなければならないと言うことは、私たちの頭や本能では理解しています。しかしそこで大きな問題が起きます。それが傷です。人から浴びせられる多くの傷が、私たちが正しいことをやりたいときに出来なくさせる大きな動機です。人に傷つけられる・裏切られる・苦しい目にあわされる経験をした人は計算だかなくなってしまいます。計算をして「こうすればああなる」「こうすればこうなる」という行動をとってしまいます。こうなると私たちは「自分は本来こうした方がいい」と思つていても「こういう風にしなないとこうなるかもしれないから」と自分の心に嘘をついて行動をとってしまうようになるのです。それが愛の冷めきつた現代で起きている終末的な大問題です。だから私たちは今、嘘をつくことが「あたりまえ」になっています。人のご機嫌をとるために平気で嘘をつきます。相手と会話するのが嫌なのでその場しのぎの発言をします。だからお互いに関心をもちません。マザーテレサは「愛の正反対は無関心である」と言います。その人と向き合うのが面倒くさいから無関心になって自分には関係ないと言つてしまいます。私たちはいつまで好む関心を貫くのでしょうか？しかし、自分は愛されたいのです。自分は相手に無関心ですが自分は相手に愛されたいのです。そういう人たちが愛し合うと言って結婚して愛を保つことが出来るでしょうか？敬者にあたる方々は、この愛しあう生活に根性がプラスされています。我慢する心・忍耐です。しかし現代の若者にはこのようなものはありません。確かに幕末の日本も人の生き死になつてどうでもいらい腐っていました。だから、人が殺し合う時代を終わらせるために改革者が動いたのです。現代は心を殺し合う時代になってしまいました。私たちはもう一度考えなければいけません。今までは忍耐でもっていましたがもう忍耐では耐えられません。私たちがもたなければならないのは「正しい心」です。何が正しいのか私たちは知っています。聖書にこう書かれています。（ピリピ4:4～9）この箇所を伝えている人は、誰から学びどのように受けたのでしょうか？それはイエスキリストの十字架の死です。イエスキリストはただ1つ自己犠牲を行いました。人を変えるために自分が犠牲になつたのです。言葉や口先だけで嘘・偽りを伝えるのではなく、十字架に進んだのです。私たちが自分を欺き、自分の重荷を負おうとせず、その重荷をすべて他人に負わせようとするのです。これが自己中心と責任転嫁です。この罪を贖うためにイエスキリストは十字架に進んだのです。アダムとイブの原罪に始まり私たちはまだ責任転嫁をしてしまうことがあるかもしれません。誓書で言う「私たちは罪人」はこの部分にあたります。生まれながらにして自己中心で人に罪を転嫁して自分は正しいと思つてしまう心をもっているのです。しかしその心を変えることが出来るのなら何も罪を犯していないにもかかわらず、私たちの重荷を背負ってイエスキリストは十字架に進んだのです。私たちはまだイエスキリストの十字架を無にして生きるのでしょうか？今まで我慢して生活してくれていた人の努力を思い起こして自分の生き方を顧みなければいけません。そして、今まで我慢して生きてこられた方々は傷ついた重荷をおろしてください。心の内にさまざまな思いや葛藤があるかもしれません。しかしこれからの歩みは、いろいろな思いや傷や苦しみなどその全ての重荷を降ろし委ねることで耐えられるのです。そしてイエスキリストが語つた言葉「自分の隣人を愛しなさい」自分の周りにいる人々を自分のように愛しなさいと言われています。また「心の貧しいものは幸いです」と語られています。それは自分の心を探し求めることが出来るからです。現代では人を見ても自分の心の内は見なくなりました。「自分は正しい」とひとこと言つて終わってしまうのです。何が正しいことか・自分の心は今何を考えているのか・自分の弱さを知ることは私たちが強くなる秘訣です。重荷をおろすと言うことはこういうことです。私たちの心の内にイエスキリストの愛が流れると私たちから素晴らしい愛が流れ出て日本を変えることが出来る彼らのように私たちの周りから何かが変わります。1人が変わるとみんなが大きく変わります。自分に死ぬと自分を知ることが出来ます。そして自分を知ると自分がどうあるべきかを知ります。そういうことが出来れば私たちから変わっていくことが出来ます。自分の弱さや傷や重荷をイエスさまに委ねて自分を見るのを止めないでもう一度自分の心の美しさに気づいてください。神さまは私たちを一番良いものとして創造されました。ですから私たちが輝けば真っ暗な世の中が輝きます。闇も照らすことが出来ます。私たちも月のように輝ければよいと思います。（要約者：行司佳世）